

## 小1の壁

2024.5.17

家人に聞いてみた。「スタートカリキュラムって、やっているの?」「アプローチカリキュラムって知ってる?」すると、「小1の壁って知ってる?」と切り返された。小1プロブレムとは違うのか。わからない。

幼小接続期カリキュラムのうち、幼児期の学びが、小学校の生活や学習で生かされてつながるように工夫された5歳児のカリキュラムをアプローチカリキュラムという。一方、小学校入学後に実施される合科的・関連的カリキュラムをスタートカリキュラムという。

では、「小1の壁」とは何か。それは、共働き家庭や一人親家庭において、子どもが保育所等から小学校に入学した際、小学校では朝や親の退勤時間まで子どもを預かることはできないために親が直面する問題のことである。

保育所等では、朝や遅い時間までの延長保育があるところも多い。そのため、ある程度は朝でも遅い時間まででも子どもを預かってもらえる。しかし、小学校に入学すると、公的な学童保育は通常18時で終わってしまうところが多い。その結果、保育所等よりも預かり時間が短くなってしまい、子どもが家で一人で過ごす状況になることが多くなる。

小学校に入学してすぐに子どもがしっかりするわけではない。この状況に対応できない家庭は、子どもの小学校入学を機に、働き方の変更を迫られる。

特に、朝の小1の壁がむずかしい。今までは、出勤前に保育所等に子どもを預けることができた。ところが、小学校は7時45分にならないと昇降口が開かないとしたらどうなるだろう。さて、どうするか。中には、子どもが家の玄関のカギを閉めて登校するというケースもあるかもしれない。親が子どもに「いってらっしゃい」を言えないのである。

まだまだ、学童も地域サービスも十分ではない。多様な働き方に対応するための企業の取り組みもこれからである。私が勤務する幼稚園では、毎朝、親御さんが子どもたちを幼稚園まで送ってきてくれる。帰りも迎えに来てくれる。これが、一般的な姿だとは思ってはいない。きっと、幼稚園に入園するにあたり、それぞれの家庭で話し合いがもたれたに違いない。仕事を変えることになったかもしれない。子どもを最優先にするための決断があったかもしれない。そう思っている。

昔、イタリアにいたことがある。小学生が親御さんと一緒に登校していた。何だか余裕があった。時間に追われている様子はなかった。日本も、将来的にはそうなるのかもしれない。だが、現状を見る限り、まだまだ先の話である。

幼稚園や保育所に子どもを通わせていた家庭が、小1の壁に立ち向かわなくてもすむよう、社会全体で考えていく必要がある。幼稚園に子どもが通ってくれるのは、決して普通のことではないことを肝に銘じておきたい。